

立ち止まる

2023. 10. 12

立ち止まりたいと思うことはないだろうか。新しいものやカギとなる瞬間を、我々は、たいてい忙しさにかまけてやり過ごしてしまう。忙しく仕事に追われすぎて、自分の内にあり外にもある創造の源に気づくことができずにいる。スマートフォンに縛られ、何かをする時間がとれないでいる。すぐに目的のものを得ようとする性急な現代では、どこにでも行けるが、どこにもたどり着かない。すさまじいスピードについていくのがやっとなので、何かを変えるために立ち止まるということが、ほとんどない。立ち止まるのが極めてむずかしい。

こうなると、例えば働き方改革は、なかなか進まなくなる。働き方を変えようにも、どうすればいいのかわからない。これが教育界の現状であろう。何のノウハウもなしに、解決に向かおうとするのは、武器を持たずに戦に挑むようなものである。何か道標がほしい。

改革のためには、これまでの当たり前を問い直すステップが必要となる。これまでのよかったこと、手応えを感じていたこと、役に立っていたことさえも聖域化せずに再検討していくことになる。それは、これまでのいい授業、いい教育、いい学校、いい教材研究、そして、いい教師像をも捉え直す必要があるということである。働き方改革は、教師のアイデンティティを喪失させるリスクを抱えている。

自分たちの働き方が、勝手に変えられていくことに違和感を抱く教員もいるだろう。改革は、誰かが方向性を決めてくれれば、誰かが推進してくれれば、ばら色の結末が約束されるものではない。当事者意識をもって推進していくものでなければ、持続可能性は見込めない。自分たちの働き方を自分たちで決めていくことが必要となる。

この2学期は、少しでも働き方改革を進めようと考えている。だが、現実はその甘くない。前に進もうとすればするほど、課題が見えてくる。一度、立ち止まりたい。だが、それもできない。走りながら考えていくしかない。

教員、すなわち学校は、変わりにくい体質をもっている。いや、もっていた。時代とともに、徐々にではあるが、変わらなくてはならないという意識にはなっている。だが、どう変わっていけばいいのかわからない。教育が時代の先をいけばいいのだが、どうしても時代から遅れ気味になる。

働き方改革が進めば、少しは余裕ができ、立ち止まることができるようになるのだろうか。改革が先か、立ち止まるのが先か、これでは問題は解決しない。世の中が、教員の負担軽減のために動いてくれている。それはありがたいことである。問題は、それが現場の教員にとって、腑に落ちるものであるかどうかである。前に進むことは必要である。だが、それ以上に、立ち止まることはより重要である。